



図 3

6) 古典的結節性動脈周囲炎 (CPN) の際にみられる病変は fibrinoid necrosis による血管壁の一局所における脆弱化または融解性変化といえる。これを立体的に観察すると、病変部はあたかも憩室のごとくみられる。

7) “A”非形成例と“A”形成例は同じ病変を基盤として起ったものであるが、CPN はその変化の性格が全く異なるものと考えたい。

8) 川崎病の“A”非形成例と“A”形成例、それに CPN における冠動脈の組織学的所見を総括したものが表 2 である。

表 2 Histopathological changes of Coronary arteries in MCLS and CPN in childhood

		Case-1	Case-2	Case-3
Arterial changes	Aneurysm	+	-	+
	Rupture	-	-	+
	Thrombosis	+	-	-
	Fibrinoid necrosis	-	-	卅
	Inflam. cell infiltr.	+	+	卅
	Intimal thickening with elastosis without elastosis	+ ±	+ ±	- +
Localization	Elastica interna dissociation resolution	+ -	+ -	- +
	Medial change	-	-	+
	Orifice	±	±	- ±
	Branching portion	+	卅	not related
	Main branch	卅	+	卅
	Peripheral branch	+	+	- ±

IV. 結 語

我々は川崎病剖検例の冠動脈瘤非形成例、冠動脈瘤形成例、そして古典的結節性動脈周囲炎の冠動脈の変化について連続切片を作製し再構築を行い立体的観察を行いいくつかの知見を得たので報告した。(文責：直江)

川崎病患児の発疹の光顕像と電顕像

予研病理部 江・頭 靖之 鶴原 喬

川崎病の原因々子を患児の皮膚の発疹について探る試みを始めた。材料はすべて日赤医療センター小児科の協力によった。

組織用、電顕用ともに採取直後にそれぞれ中性ホルマリンとカコジル酸緩衝液稀釈冷グルタルアルデハイドで固定した。組織学的に見られる病変の主変は表皮直下であり、乳頭部における水腫と毛細血管および細血管の反応が目立ち、管壁の細胞繁殖と滲出細胞を含む血管周囲の細胞と結合織の変性が著しい。電顕写真上でもこれら

の所見は明らかで、そのほか真皮浅層ときに表皮深層にある変性した細胞の核内に径 15~25 nm のフィラメント構造が充満しているのが観察された。これまで検査した 6 例中の 4 例に同じ構造が見つかっており、ましん患者材料等の核内に見られた、パラミクソウイルスのヌクレオカプシドにその大きさと構造がかなり近い。しかし川崎病の病原因子との関係を論ずる前に、核の変性産物の除外をはじめ、種々の対照材料や類似病巣の十分な検査が必要である。

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

川崎病の原因因子を患児の皮膚の発疹について探る試みを始めた。材料はすべて日赤医療センター小児科の協力によった。

組織用, 電顕用ともに採取直後にそれぞれ中性ホルマリンとカコジル酸緩衝液稀釈冷グルタルアルデハイドで固定した。組織学的に見られる病変の主変は表皮直下であり, 乳頭部における水腫と毛細血管および細血管の反応が目立ち, 管壁の細胞繁殖と滲出細胞を含む血管周囲の細胞と結合織の変性が著しい。電顕写真上でもこれらの所見は明らかで, そのほか真皮浅層ときに表皮深層にある変性した細胞の核内に径 15~25nm のフィラメント構造が充満しているのが観察された。これまで検策した 6 例中の 4 例に同じ構造が見つかり, ましん患者材料等の核内に見られた, パラミクソウイルスのヌクレオカプシドにその大きさと構造がかなり近い。しかし川崎病の病原因子との関係を論ずる前に, 核の変性産物の除外をはじめ, 種々の対照材料や類似病巣の十分な検策が必要である。